大手前大学論集　第11号（2010）51—85頁

『ダンマパダ』と教育㈢

古田榮作

要　旨

『ダンマパダ』は、その第九章を「悪の章」として、描き出している。在家信者への五戒を中心とする宗教的教訓は単に宗教上の教訓であるばかりでなく、広く日常的な生活倫理として重要な役割を渡してきた。四姓平等と輪廻転生を説く佛教の教えが日常生活に生かされる生活信条としての善悪という行為の倫理性の関連を因縁譚に基づいて考察した。

キーワード：五戒　輪廻転生　善と悪

『ダンマパダ』は、全編至るところで善悪について論じている。『ダンマパダ』のような宗教的文書が、善悪に言及することは、宗教的信念が、行為・思考の善悪を、信仰の存否、深浅と関連付けて位置づけしようとするものにほかならない。しかし、『ダンマパダ』は、その一連の章句のまとまりを、悪とか罰とか地獄とかと題して記述しているのである。

佛教は、出家者への具足戒ばかりでなく、在家信者に対しても五戒とか八斎戒とか十善戒とかで、日常的にもしくは特定の日に信者として守るべき箇条を課している。

本稿では、その悪行の章（Pāpavagga）[1]と題されるものからいくつかの章句を選んで、宗教的な信条に言及された善悪が、生活信条として捉え直されていることの意義を考察する。

論考に先だって、佛教の基本思想を提示するものとして再度「七佛通誡偈」[2]を取り上げてみよう。

Sabbapāpassa akaraṇaṁ　　kusalassa upasampadā
Sacittapariyodapanaṁ　　etaṁ buddhāna sāsanaṁ.（183）

一切の悪業をなさざること、善業を具足すること、自分の心を遍く清くすること、これが諸ブッダの教えである。（183）[3]

Khantī paramaṁ tapo titikkhā　　nibbānaṁ paramaṁ vadanti buddhā.
Na hi pabbajito parūpaghātī　　samaṇo hoti paraṁ viheṭhayanto.（184）

忍辱は最高の苦行なり、涅槃（ニバーナ）[4]は最高の〔境地である〕と諸ブッダは説く。実に出家者は他を害することはない。沙門は他人を困らせることをしない。（184）

Anūpavādo anūpaghāto　　pātimokkhe ca saṁvaro
Mattaññutā ca bhattasmiṁ　　pantañca sayanāsanaṁ
Adhicitte ca āyogo　　etaṁ buddhāna sāsanaṁ.（185）

〔他人に対し〕無非難にして加害せざる、あるいは〔自分に対して〕戒条を守る、或は食事に関して適量を知り、あるいは辺境の地を臥坐処とする、あるいは禅定[5]に努力する、これが諸ブッダの教えである。[6]

これらの諸章句についての因縁譚は、次のような形で示されている。[7]

これらの宗教的教訓は、尊師がジェタヴァナ（ジェタ林＝祇園精舎）に住んで居られた時、アーナンダ（阿難　阿難陀とも表記される）長老の問いについて語られたものである。[8] 長老は昼間道場に坐り、考えた。「尊師は過去七佛の母父・壽命（の長さ）・その下で悟りを開かれた木（＝菩提樹）、弟子集団、最上の弟子、およびその主要な支援者について話された。しかし布薩の様式についての言及はなかった。布薩のあり方は過去佛のものと現在のものとでは、同じなのか異なっているのであろうか？」[9] そこで彼は尊師に近づき、彼にその事について質問した。

そこで尊師は、過去七佛の場合には、期間の差異はあるものの、その行事については、現在のものと差異はありません。「〔布薩の際に〕唱えられる章句があるんだよ」と言って、上記の章句を示された。

第一偈は、「諸悪莫作　諸善奉行　自浄其意　是諸佛教」[10] と漢訳されているものであるが、出家以後は阿羅漢果を得るまでは悪、不善行を為さないこと、善を起こし修すること、五蓋[11]から自己の心を浄めることが善とされ、世間的な価値観を捨てて一切の汚れをぬぐい去り、清澄で赤裸々な心になること、これが諸佛の教誡である、とされ、個人の自主性、自己の意志を尊重したものであるとされる。

第二偈は「忍辱は最上の苦行」と苦行を重視し、その忍辱（Ⓢkṣānti）とは「自分に何の落ち度もなく他人から理不尽な非難や迫害や辱めなどを受けても耐え忍び、これに反撃したりせず、慈悲の心で接すること」[12] を意味するが、これこそ仏道修行の根本であり。智慧と慈悲に裏づけられたものでもあり、更に無貪・無瞋・無癡なる「涅槃は最上である」とは、およそ佛と呼ばれる者すべての言説である。佛道の出家沙門には忍耐があり、安らぎがあって、手などの身をもって他を害すること、あるいは罵りなどの語をもって他を害することはありえない。勿論自己を害することも後悔もあり得ないとするのである。（第二偈の漢訳は「忍爲最自守　泥洹佛稱上　捨家不犯戒　息心無所害」[13] である。）

第三偈は、佛道修行には身体と口とを慎み、最上の「根本戒」なるパーティモッカ（＝波羅提木叉）によって防護し、閉じるべき感官（根）をよく閉じること、われわれの毎日に不可欠な食事の適量を知り、生活を浄めること、すなわち「慧」を含む「戒」の重要性を教えるものである。また、「遠く離れて臥し坐り」[10] は、ふさわしい場所に静かに身を置くこと、すなわち身の遠離を説き、また「禅定によく励

み」、静かに心を置くこと、すなわち心の遠離を説き、「定」の重要性を説く。教団発展の中で比丘・比丘尼への禁戒を意味するようになったとされている。（第三偈の漢訳は　「不嬈亦不惱　如戒一切持　少食捨身貧　有行幽隠處　意諦意有黠　是能奉佛教」[14]である。）

これら三つの教訓は宗教的教訓として与えられたもので、主たる対象は出家者なのである。出家者にとっては、心の清澄を保持し、忍辱に努め、智慧と慈悲に裏づけられた無貪・無瞋・無癡の涅槃の状態こそが窮極の境地であることを示すばかりでなく、そのために身・口・意による他者への加害は以ての外であり、自己への加害（自殺・自傷は勿論、後悔などの自己の心への過重負担すら相応しくないとするものである。ここでは善が、心の清澄への行為、悪が心の汚濁への行為として位置づけられていることも特筆に値しよう。

「七佛通誡偈」は、佛教の精神を端的に表すものであるが、釋尊の個人の思想としてではなく、釋尊が過去の佛から受け継いだものとして表現されているところにその特質があることも併せて指摘して置きたい。

また、心の章には

Anavaṭṭhitacittassa　　saddhammaṅ avijānato
Pariplavapasādassa　　paññā na paripūrati（38）

心が確立せず、正法に無知であり、信仰が不安定な人の〔悟りの〕智慧は、完全とはならない。（38）[15]

Anavassutacittassa　　anavāhatacetaso
Puññapāpapahīnassa　　natthi jāgarato bhayaṅ.（39）

煩悩に流されることなく、〔怒りに〕心が混乱することもなく、善と悪を捨断した眠らぬ人〔＝阿羅漢〕には、恐怖はない。（39）[16]

これら二つの偈には以下のような因縁譚が伝えられている。[17]

一人の貧しい農夫がいた。彼は毎日汗を流さずに働かなくても信者たちから食事が与えられ、皆から尊敬される比丘に憧れてサンガ[18]に入団した。やがて彼の痩せ細っていた身体は信者からの贅沢な施食によって健康を取り戻し快適な出家生活が続いた。しかし、しばらくすると彼の心の中に不満が生じ始め「……私に信者たちの施しを受ける価値があるのだろうか?」と日夜自問することが続いた。そして一生懸命働かなければ一口のご飯にもありつけなかった以前の百姓生活が懐かしくなり還俗したのである。しかし、元の貧しい生活に戻ってみる

と、あの気楽な比丘生活がまた懐かしくなり、再び彼は出家をした。これを六回繰り返した彼は、気分次第で出家と還俗を繰り返すという意味からチッタハッタ（Cittahattha　心を手とするの意）という名でサンガでは呼ばれた。六回目の還俗の時、彼の妻が妊娠した。チッタハッタは仕事から帰ると隣の部屋でだらしなく寝ている妻の姿を見た。その時、彼はこの世の無常と苦というものを感じ、七度目の出家を決意したのである。妻の母親は家を出るチッタハッタの後ろ姿を見て急に心配となり、娘の家に立ち寄った。そして寝ている娘のだらしない姿を見て「彼はがっかりして、また家を出たと感じたのである。チッタハッタは僧院に向かう道中の瞑想によって預流果の悟りを得た。そして雑役係という形でようやくサンガに入団を許された彼は、真剣に修行に打ち込み、すぐに最高の悟りである阿羅漢を得た。ある日、仲間の比丘が、「友よ、そろそろ還俗する時ではないか?」とチッタハッタに声をかけると、「私はもう還俗することはありません。何故ならば阿羅漢果を得たからです」と彼は答えた。これを嘘と誤解した仲間の比丘たちは彼を仏陀に訴えた。仏陀は「私の弟子のチッタハッタ嘘を言っていない」と答えられ、「比丘たちよ、心がざわめき動いて正法を知らず、信仰も浮わついている人に悟りの智慧は、満ちることはない」「しかし、愛欲に心が濡れることなく、怒りに心が混乱することもなく、善と悪を捨断した目覚めた人（＝阿羅漢）には、恐れはないと説かれたのである。さらに仏陀は、「実は私もチッタハッタと同じ様に過去世において出家と還俗を七度繰り返したことがあった」とご自身の過去世の一つを語り始められた。

昔、クッダーラ（Kuddāla　鍬の意）という男が出家してヒマラヤ山中で八ヶ月間修行をしていた。ある雨期の夜、クッダーラは雨で大地が湿っているのを見て『種まきにはこの時期を逃してはならない。私の家には豆の種と鍬があったはずだ』と思い出し、いそいそと山を降りて家に帰るや豆の種と鍬を持って畑に出掛け豆の種をまき始めたのである。やがて豆が大きくなり収穫を終えると、彼は豆を食料用と種まき用に分けて家の倉庫に貯蔵した。この作業が一段落した時、ふとクッダーラは自問した。『……何故、私はここにいるのだ?確か出家してヒマラヤ山中で修行していたはずが』と気づき、再び山に戻り修行をはじめた。しかし又雨期が来ると豆の種と鍬を思い出し、山を降りて畑に豆の種をまき、収穫を終えると再び出家することを六度繰り返した。七度目の時、彼は真摯に反省した。『私はすでに六回も出家と還俗を繰り返している。原因はあの豆の種と鍬だ』と思うや豆の種と鍬をもってガンジス河に行き、目隠しをしてこれを思い切り遠くへ投げ捨てると、『私は勝った!私は勝った!』と大声で叫んだのである。その時、この地方の盗賊をたちを鎮圧していたペレナス王が彼

の声を聞き、『私はこの地方を荒らし回る盗賊どもを今退治し終えたところである。しかし、あの男は一体誰に勝ったのだ？』と怪訝な顔をした。王は家来に命じてクッダーラを連れて来させ、『私が盗賊どもを退治して勝鬨の声を上げようとする直前、急に『私は勝った！私は勝った！』というお前の声が聞こえて来た。見るところお前が倒したと思われる敵の姿が見当たらない。一体お前は誰に勝ったのだ？』と尋ずねた。この質問に対してクッダーラは、『王よ、あなたは外の敵に勝利された。しかし、私は、内なる敵、欲望という名の敵を打ち負かしたのである。この私の勝利こそ真の勝利である。』と答えた。この言葉に感銘を受けた王はその場で髪を切り出家したのである。このクッダーラこそ私自身であると語られたのである。

前者の因縁譚では、家庭ないしは妻への執着、後者の種ないしは収穫（その象徴としての鍬が修行への桎梏となり、修行に専念できない者がその執着を断ち切った時に、心の平静を獲得し、修行の上での新局面を獲得するのである。

この偈に示されるのは外面の敵にとらわれることなく、自分自身の欲望などの内面の敵、すなわち対象への拘り、執着こそが内面の敵の正体として浮かび上がってくるのであり、心の平静の確保のための修行（広く捉えるならば修養）が重要となるのであり、禅などを通しての内観が重視されることとなる。

さて、『ダンマパダ』は、その第九章は「Pāpavagga」（悪行の章）と題されている。この章で、仏教的な思想を端的に示すものを二三取り上げてみよう。その冒頭に掲げる章句は

Abhittharetha kalyāṇe　　pāpā cittaṁ nivāraye
Dandhaṁ hi karoto puññaṁ　　pāpasmiṁ ramati mano.（116）

善いことは、急ぐべし、悪いことから心を防護せよ、実に善行の愚鈍によって、意は悪を楽しむ。（116）[19]

この章句は、尊師（＝釋尊）が、ジェータ林（＝祇園精舎）にお住まいの時、チューレーカサータカという、バラモンについて説かれたものである。[20]

伝説によれば、ヴィバッシー佛の時代にマハー・エーカサータカ（大一枚）という名のバラモンがいた。彼は、現世では、サーヴァテッティ（＝舎衛城）に住む、チューレーカサータカ（小一枚）であった。というのは、彼も妻も一枚の内衣を着、外出時には共用の一枚の外

衣をまとうのみであったからである。

ある日、僧院で説教がなされた。妻は昼に、彼は夜に、外衣をまとって出かけた。僧院に出向いた彼は、尊師の正面に座り、法を聞いた。彼が法を聞いている間に、五種の喜びが起こり、全身に満ち、彼は尊師に布施したいと思った。しかし、施すものは外衣以外には何もない。もしこれを施したなら、我々は外衣がなくなってしまう……。彼の心中に強い物惜しみの心が生れた。施すべきか、施さざるべきか。心は千の物惜しみと一つの信仰の間で揺れ動いた。そのうちに初夜が過ぎ、中夜が過ぎ、後夜になってしまった。かれは考えた。「これ以上物惜しみの気持ちが高まれば、四悪趣から身を出すことができない。施そう」と。とうとう信仰心を確立した彼は、外衣を尊師の足元に置き、「私は勝った、私は勝った、私は勝った」と三度、大声を出した。

コーサラ王のパセナディも偶々その説法を聞いていた。彼が叫び声を聞いて彼は家来に「いったい彼は何に勝ったのか？聞いて来い」と命じた。王の家来がバラモンに質問し、バラモンは彼らに事態を説明した。王が説明を聞いて、「何とが為しがたいことかバラモンが為したことは！この者を手助けしてやろう」と一対の衣を与えさせた。しかしバラモンはそれも如来（＝尊師のこと＝Tathāgata）[21]に施した。そこで、王は次々と衣をバラモンに与えさせた。がしかしバラモンはそのすべてを尊師に施してしまった。そこで王はバラモンに三十二着の外衣をプレゼントするよう命じた。しかし「バラモンは自分のための外衣を持っていないが、受け取った外衣は全て如来に与えてしまった」と言うのを避けて「一枚はお前自身のために、もう一枚は貴方の妻のために」と言った。そう言って、バラモンに外衣二着を与え、残りの三十着だけは尊師にさし上げた。

王は家来に「バラモンが為したことは本当に難しいことだ。贈り物部屋に二枚の毛布を持って来い」との命令を出した。彼等はそうした。王は、一〇〇〇金の毛布を二枚彼に与えた。バラモンは「こんな立派な毛布で覆うほどの価値は私にはない。ブッダの宗教を信じて実行している者こそふさわしい。」と自分に言い聞かせた。従って彼は毛布の一つで天蓋を作って香りの部屋の尊師のベッドの上に吊り下げ、もう一つの毛布で天蓋を作りそれを托鉢のために彼の家で休息する僧が食事を取る場所の上に吊り下げた。晩課で王は尊師の所へ行った。天蓋を認めたので、彼は尊師に「尊師、この天蓋を貴方を布施したのはどなたですか？」と尋ねた。「エカサータカです。」王は「私の信念を信じ喜ぶのと同じく、バラモンは彼の信念を信じ喜ぶ」と思った。従って彼は四頭の象、四頭の馬、四〇〇〇金、四人の女、四人の女奴隷、

四つの素晴らしい村を贈った。このように王はバラモンに四の贈り物を与えた。

僧たちは真理の間で討論を開始した：「ああ、チューレーカサータカの行ないの素晴らしさよ！行なうとすぐにあらゆる種の四の贈り物を受け取った。彼が善行をなすとすぐにその果が彼に与えられる。尊師は僧たちに近寄り僧に「僧よ、あなたがたはここで座って何を話しているのか？」彼らが尊師に話した時、尊師は「僧よ、チュレーカサータカは初夜に私に贈り物をすることを決意できたなら、彼は十六の贈り物を受け取ったであろう、中夜でそうできれば、八の贈り物を得ることができただろうに、後夜の遅くになって初めて決意したので、彼は四つの贈り物のみを手にした。善業を為した者は彼の中で生起した善への刺激を除去すべきではない。遅々として為された立派な行為はその報酬をもたらすが、それがもたらす報酬は遅々としている。それ故に人は自分の胸中に善への刺激が瞬間に善業を遂行すべきである。そう言って、彼は僧の集団に加わり、法を説き、次の章句を唱えた。

一一六　善をなすことは急げ。人が悪を為すことを慎め。
　　というのはもし人が善を為すのを遅らせば、彼の心は悪を喜ぶ。

善行の遂行には躊躇しない、悪行などを為したいとの不善の気持ちが生じたならあらゆる努力を尽くして心を守れとの俗人にも通用する教訓である。

貧者の一燈に酷似する因縁譚である。説法に歓喜し、何か布施をしたいとの気持ちと現実の生活への影響との葛藤の末、信仰を重視する決意がより深い信仰へと導くことを教えるものである。宗教的には布施への躊躇という利己心と信仰心との葛藤の末の決意・行動が無垢な心の保持と浄業の遂行こそが重要だとし出家者ばかりでなく、広く沙門にも勧めている。ここでくだされている宗教的な教訓は、善行には躊躇するな、悪事を忌避するのも躊躇するなと善行の遂行、悪事の忌避への躊躇を戒めるものとされている。決断の遅れこそ、得られるはずの果を小さくするとの教えに矮小化されてしまっている。いささか蛇足的な教訓となってしまっている。

Pāpo'pi passatī bhadraṁ　　yāva pāpaṁ na paccati
Yadā ca paccatī pāpaṁ　　atha pāpo pāpāni passati.（119）

悪行〔の異熟〕に苦しめられない間は、悪行も吉祥に見える。しかし悪行〔の異熟〕に苦しめられた時、悪行はいろいろな悪にみえる。(22)

Bhadro'pi passati pāpaṁ　　yāva bhadraṁ na paccati
Yadā ca paccati bhadraṁ　　atha bhadro bhadrānipassa ti.（120）

善行〔の異熟〕が煮えつまらない間は、善行も悪に見える。しかし、善行〔の異熟〕が煮つまった時、善行がいろいろな吉祥に見える。[23]

この二つの章句は悪因悪果、善因善果ないしは因果応報を示すものであり、次の因縁譚が示される。

この宗教的教訓は、尊師がジェータ林（＝祇園精舎）にお住まいの時にアナータピンディカ長老（＝須達＝須達多＝給孤独長者）[24]について説かれたものである。

彼は五億四千万金（クローレ）の財をもって祇園精舎を建立・寄進し、尊師が祇園精舎にお住まいの時は毎日三度の大奉仕を行い、僧院に出向く時には、僧や若者たちのために必ず食べ物や花、香などを使用人に持参させた。また、商人たちのために一億八千万金を貸し、川岸に一億八千万金を埋蔵して暮らしていた。ある時、洪水ですべての埋蔵金が流されてしまった。徐々に生活は苦しくなり、僧団への布施は止むことはなかったものの、以前のように勝れたものを用意することができなくなった。

ある日、尊師は「今もわれわれに布施をなさっておられるのですか?」と尋ねられた。

「はい、尊師。ですが、粗末なご飯や酢粥です」「長者よ、そのように『粗末な布施をしている』と考えてはなりません。心が勝れていれば、われわれへの布施は粗末なものにはなりえないからです。しかも、そなたは八賢者（＝八輩）に施したのです。私はかつてヴェーラーマ（＝菩薩＝釈尊の前生）の時に、全インドをあげての大布施をしましたが、三帰依すら受けることができませんでした。布施を与えるのにふさわしい人を見出すことは困難なことです。だから、「私の布施は租食にしか過ぎない」との考えに心乱されてはならない。そう言って、尊師は「ヴェーラーマ経」（増支部　九章）を説かれた。

尊師とその弟子が給弧独長者の家に入った時、門屋に棲んでいた女神は、彼らの善性の強烈さの故にそこに留まるのが不可能だとして、「尊師やその弟子たちがこの家に出入りすれば、その威光で私はここにとどまることができなくなるだろう。彼らの出入りを阻止しよう」と考えた。彼女は「長者よ、あなたは沙門ゴータマのために莫大な財産を費やし、貧乏になってしまいました。このままでは二、三日で衣食が得られなくなります。沙門ゴータマがあなたの何になるというのです。布施を止めて仕事に専念し、財を築くべきです」と。「それが

あなたの私への助言ですか?」「そうです」「それなら、出て行きなさい。あなたがなそうとすることを十万回したとしても、あなたは私の方針を変更することはできないでしょう。あなたは言ってはならないことを言ってしまった。私の家の傍に棲んでいてあなたはどんなことをしてきたんですか?直ちに私の家を出てゆきなさい。女神は改宗の果を得た長者の言葉に逆らえず、子どもを連れて（長者の）家を去った。

棲む場所を無くした女神は、再度長者の所に棲みたいと考え、その手立てを町の守護神に相談したが、拒否され、他の守護神、神々からも拒絶され、途方に暮れた女神は神々の王であるサッカ（＝帝釈天）[25]に長者を取りなしてくれるよう哀願した。サッカは「そなたのために長者を取りなすことは私にはできません。しかし、たった一つのだけ方法があります。」と言った。「すばらしい。サッカ様、どうしたらいいのか教えて下さい」と。サッカは「それは長者から金を借りた小商人たちに長者への借金を返させることです。そのために、長者の召使いの住所を思い出しなさい。彼と協力して長者の財産リストと債務者のリストを作りなさい。債務者からの返済と流出した財寶の収集によって彼の空になった蔵を満たしなさい。そなたの力でこのように償いがなされれば、そなたは彼に許しを請うことができましょう。」と言い、「なるほど」と女神は言い、直ちに彼女はそれらすべてを成し遂げた。そこで、彼女は長者の家に行き、宙に浮いたままで長者の部屋を超自然的な輝きを発しながら留まっていた。「そなたは?」長者は言った。女神は答えた。「昔あなたの家の門屋に棲まわしていただいた、盲目で、愚昧な女神です。かって私が盲目の愚昧さで話したことをお許し下さい。神々の王であるサッカの命に従って、私はあなたの五十四クローレの財産を回復し、あなたの空の蔵をそれによって満たしました。このように私は罪の償いをしました。私には住む所がございません。困っております。」給孤独長者は「この女神は私に『自分の犯した罪の償いをした』と言ったし、自分の罪を告白した。彼女を超自然の啓発者として振舞おう」と考えた。それで彼女を尊師に対するように行動し彼女に言った。「尊師、あなたのなさったことをすべてお話下さい。」と。女神は屈んで尊師の足元に顔を付けて言った。「尊師、私の愚行のために私はあなたの卓越した利益を認識できず、悪魔の言葉に踊らされてしまいました。お許し下さい。」こうして女神は尊師と長者の双方に許しを請うた。そこで尊師は長者と女神の双方に善と悪の行為の成熟に関して忠告した。「現在の生活においては、威大な資産家も、その悪意の行動が十分に熟さない限り、悪意の行動者すらも、幸福を知っている。しかし同様に、その悪意の行動が熟するや直ぐに、彼は悪のみを知る。善意の人も、その善意の行動が熟し

ていない限り悪事を知る。その善行が熟すれば直ちに、彼は幸福のみを知る」と。

尊師の与えた宗教的教訓は、身の悪行などの悪業を行なっている人でも、それ以前の善行の力によって生じた樂を受けるため、悪業が熟さないうちは、「悪人さえも善を見る」が、悪業が果報を与える時、彼は現世においては種々の業の報いを、来世では悪趣の苦を受け、「もろもろの悪を見る」。善業についても同様のことが起こり、「善人さえも悪を見る」し、「もろもろの善を見る」。善悪は、誰にも例外なく、過不足なく、その果を与える、こうした因果を説くものである。輪廻の思想に支えられながら、「善因善果」「悪因悪果」を大きな時間軸で解明しようとしているのである。

Māppamaññetha pāpassa　　na mantaṃ āgamissati
Udabindunipātena　　udakumbho'pi pūrati
Bālo pūrati pāpassa　　thokaṃthokam pi ācinaṁ.（121）

悪行〔の異熟〕は私にはやって来ないと〔小さな〕悪行を軽く見てはならない。水滴が落下によりて〔やがて〕水がめを満たすように、〔悪行の異熟が〕少しずつ積み重ねられ〔やがて〕愚者は悪に満たされる。（121）[26]

人は悪を軽く考えるべきではない。……この宗教的な教訓は尊師により整然と必要条件を保持することに失敗した僧に関連してジェタヴァ（＝祇園精舎）にお住まいの時に為されたものである。

伝説は、この僧が、彼が戸外で使った、ベッドや椅子のような必要物を戸外に放っておくことから始まる。かれの必要物は、このように雨と太陽と白蟻による破壊に晒されてすぐにばらばらになってしまう。彼の同輩の僧は、「必要なものは外に放り出しておいては駄目だよ」と言うのが常であった。僧は「同輩よ、私は些細な失敗をしたにすぎない。考えたり不機嫌になったりするのは無駄なことだよ」と答えた。それからも同じことを繰り返ししていた。僧は尊師に彼の行動を伝達した。尊師はかれを呼んで言った。「そなた、そなたはかようにしているとの報告は本当か?」と。尊師がかれに質問した時でさえ、僧は答えた。「高貴なお方、私はささいな間違いを犯しましたと考えたり不機嫌になったりするのは時間の無駄ですよ。このように彼は尊師に答え、彼が為したことにはほんの少ししか関心を示さなかった。そこで尊師はいった。「僧はこの原則に基づかないで行動してはならない。ひとは悪い行動を『それは些細なこと』と言って、些細なこととみ

なすべきではない。口の開いている水甕は、雨が降れば水滴で、満たされるのであるしかし繰り返し雨が降れば、淵まで満たされる。そうであれ、少しずつ罪を犯した人は大きな罪の積み重なりを集積するのである。そう言って、僧の集会に（尊師は）入り、次の章句に明らかにされる法を説教した。

一二一　人は悪行を軽く考え『それは私には当てはまらない』と言ってはならない。
水甕でさえ次々と堕ちる一滴により満たされる。愚者は彼が少しずつ集めたにすぎないが、悪で満たされる。

教訓の結論で多くの人は改宗の成果と第二と第三の道を達成した。そこで尊師は次の指針を宣言した。「彼が開かれた空間に移動するのを怠った者は罪を負うべきである。（＝露地にベッドを広げ、片付けない者は単堕となる）」

「塵も積もれば山となる」を説くものである。些末なこととして無視ないしは軽視しがちな悪い習慣を正し、他人の助言を受け入れ、あるべき姿を求めることこそが肝要であり、修行の一端としての修養を説く日常生活への教えとして捉えられるものである。

Gabbhameke uppajjanti　　nirayaṁ pāpakammino
Saggaṁ sugatino yanti　　parinibbanti anāsavā.（126）

ある人は母胎に生れ、悪業者たちは地獄に堕ちる。善業者たちは天界に行く、無漏の〔阿羅漢は〕完全涅槃にはいる。[27]

輪廻転生を示す章句であり、解脱した者はこの輪廻の環から抜け出、その他の者はその生の間の善業・悪業により六界のいずれかに転生すると説くのである。

この章句は、尊師佛陀により祇園精舎で預かり物を宝石職人に戻させた長老のティッサに関連しての説法の中で述べられたものである。その因縁譚は、次のようなものである。[28]

この長老は、十二年間ある宝石職人の家で食事を摂っており、その家の主人とその妻は彼の望みを母もしくは父が為し得るように忠実に尽そうとしていた。さてある日宝石職人は座って肉を切っており、長老は彼の前に座っていた。その時、パセンダイ　コサラ王が「これを磨き、穴をあけ、送り返せ」とのメッセージをつけて宝石職人のところに宝石を送ってよこした。宝石職人は、その手が血で汚れていたが、その宝石を取り、宝石箱に入れた。それから手を洗いに中の部屋に入って行った。

その時宝石職人は青鷺を家で飼っていた。青鷺は、血の匂いから宝石が肉の断片であると確信して、長老の目の前で宝石を飲み込んだ。宝石職人が戻って宝石がなくなっているのを知り、即座に妻と息子に「宝石をどこかに持って行った」と聞き、彼らは「どこにも持っていってないよ」と答えた。宝石職人は直ちに「長老が持って行ったに違いない」と確信し、妻に「長老が持って行ったに違いない」と囁き、妻は答えた「あんた、そんなことを言うんじゃない。長老がこの家を訪ねるようになって以来ずっと、私は彼の悪事を見たことがない。宝石を取ったのは彼ではない」と答えた。

それで宝石職人は長老に、「尊師、ここで宝石をお取り遊ばされましたか」と尋ねた。「いや、宝石なんぞ手にしていない」「尊師、ここには誰もいない。居るのは、あなた、あなた一人だけである。あなたが宝石を取ったに違いない。宝石を返しなさい。」長老は断固として宝石を取ったと認めるのを拒否したので、宝石職人は妻に「宝石を取ったのは長老に違いない。拷問をしてでも彼に質問しようと思う」と言った。「あなた、そんな破滅するようなことはしてはいけません。長老の家の門前で重荷を負うよりも奴隷になる方が私たちにはずっとましなはずです。」。しかし宝石職人は答えた「われわれ二人が奴隷になったとしても、われわれはあの宝石の代価を手に入れられない。」と。

宝石職人は、ロープを手にし、長老を頭のところで縛り、杖で長老の頭部を叩いた。血が長老の頭、耳、鼻腔から流れ、彼の眼はその眼孔から飛び出さんばかりに見えた。苦痛に堪えながら、長老は全身を打ちのめされた。青鷺は血の匂いをクンクンと嗅ぎ、長老に近づき、その血を飲み始めた。この時、長老への怒りで長老の傍らにいた、宝石職人は「ここでお前は何をしたんだ?」と金切り声をあげ、青鷺を蹴飛ばした。しかし一蹴では殺せず、後部からも蹴りあげた。長老がその行為を見て、宝石職人に「そなた、わしの頭の周りのロープを緩めてくれ。それから青鷺が死んだかどうか調べてくれ」宝石職人は彼に答えた「この青鷺と同じようにあなたも死んでしまうところだった。」「そなた、あの宝石を飲み込んだのはこの青鷺だ。しかし、青鷺が死ななかったら、宝石がどうなったかをいう前に死んでしまっただろう。宝石職人は直ちに青鷺の死体を引き裂いた。宝石職人が最初に目にしたものは宝石であった。それ以来彼（宝石職人）は恐怖に戦き、心臓は興奮で動悸を打ち、長老の足下で身を投げ出して「お許しください。尊師、私の為したことは私の無知の為に為したのです。」長老は答えた、「そなた、そなたのせいでもなく、私のせいでもないんです。前世でのあり方（＝業）のみがこのことの責めを負うべきである。私

はそなたを完全に許す。」「尊師、あなたが私をお許しになるのが本当のことであれば、私の家のあなたの慣れ親しんだ椅子に再度お座りになり、私の手から布施をお受け取りになって下さい。」「そなた、今後は他者の家の屋根の下では足を延ばさないつもりです。私の現在の状況は他人の家に入ったことの結果です。この時以来、私の足の行く所、私は家の戸の前に立つ時のみ布施を受け取る積りです。」このように長老は言って、純粋な規範を自分に課した。彼がこう言った時、彼は次の偈を発声した。

食物は聖者のために調理される。ここで少し、あそこでも少し。一軒の家から次々と。私は周りを布施のために巡回する。健脚はわがものである。

しかし、長老がこの言葉を発して間もなく、彼は宝石職人の叩きのめしを受けた傷が原因で涅槃に入った。青鷺は宝石職人の胎に再生し、宝石職人が死んだ時、彼は地獄で再生した。宝石職人の妻が死んだ時、その長老への慈愛の故、神の世界で再生した。

僧が尊師にその将来の姿を質問した。尊師は「僧よ、ここの世界で生存するは、一部は胎内に再生し、悪事を為した一部は、地獄に行き、善事を為したものは神の世界で再生する。汚れを完全に断ち切った者は涅槃へと辿る。そう言って、彼は繋がりの中に加わり、次の章句に示される法則を説いた。

一二六　ある者は、地上に再生し、悪事を為した者は、地獄に堕ち、
　　善事を為した者は天国に行き、阿羅漢は涅槃に行く。

現世での善行、悪行が、死後どの世界に再生するかを決める。善行は天界へ、悪行は地獄へ、小さな善行を為したに過ぎないものは、地上（人間界など）に、心の平静を達成した阿羅漢は涅槃にはいると、死後の有り様（＝輪廻転生）を、具体的に例示する教訓として示されている。

Na atalikkhe na samuddamajjhe　　na pabbatānṁ vivaraṁ pavissa
Na vijjatī so jagatippadeso　　yatthaṭṭhitaṁ nappasahetha maccu.

空間や、海中や、山間の洞窟に居ようとも、この世において死王を征服する場所は、存在しない。（128）[29]

天界にへも……。この宗教的教訓は尊師がニグロータ（Nigrodha）僧院にお住まいの時に、サーキヤ族のスッパブッダについて説かれ

たものである。[30]

伝説によれば、サーキヤ族のスッパブッダは、彼の娘を捨てて出家し、またその後にその息子を僧列に加入させながらも敵意を示したために、尊師を敵視した。そこである日、彼は「私は奴が施食の為に行くのを許さないぞ」と考えた。それで、強い酒を飲んで、尊師の通行を妨げようと、路上に座り込んだ。尊師が連れの僧と共に、サーキヤ族のスッパブッダが座っている地点に差し掛かった時、連れの僧は「尊師が近づいてこられる」と言った。スッパブッダは「彼に自分の道を歩けと伝えよ。彼より私の方が年上だ。彼の為には道を譲らない」と答えた。尊師の到来の予告にもかかわらずサーキヤ族のスッパブッダは同じ返答を数回繰り返し、相変わらず同じ所に坐っていた。彼の叔父が道を譲るのを拒否したので、尊師らは道を引き返した。サーキヤ族のスッパブッダはスパイを送り、「奴が何を話すか聞いてきて私に報告せよ」と命じた。

尊師は道を引き返しながら微笑していた。そこでアーナンダ長老が「尊者、どうして微笑しておられるのですか?」とお尋ねした。尊師は「アーナンダよ、サーキヤ族のスッパブッダを見たかい」と言った。「尊者、見ましたとも。」「彼は、私のような佛陀に道を譲らないという重大な過ち（＝sin）を犯しました。今日から七日目に、宮殿の一階の、階段の所で、彼は大地に飲み込まれるんだよ」と。スパイはこの言葉を聞き、急いでサーキヤ族のスッパブッダの所に行った。スッパブッダは「帰り道に甥が何を話したか?」と言った。スパイは主人に彼が聞いたことを伝えた。サーキヤ族のスッパブッダは甥が話した言葉を聞いた時、甥の話した言葉の中にはさし当りの危険はない、彼の言うことには多くの意味があるのはたしかだ。たとえそうであっても、私は彼が大嘘つきであることを証明してやろう。彼は不適切にも「七日目に彼は大地に飲み込まれる」と言うのではなかろう。かれの言ったことは「宮殿の地階の階段の所で彼は大地に飲み込まれる」であった。だから、私はその特定の場所に行かないようにしよう。特定の場所で大地に飲み込まれなければ、私はかれが大嘘吐きであることをしょうめいできる」と言った。

従ってサーキヤ族のスッパブッダは、宮殿の最上階である七階に全部の家具を運ばせ、通路を動かし、ドアを閉め閂を嵌め、ドア毎に二人の屈強な家臣を置いた。彼は屈強な家臣に「私が忘れて下に降りようとしたら、私を戻すように」と言った。そう言って、彼は宮殿の七階の素晴らしい王座に坐った。彼がしたことを聞いた尊者は「僧たちよ、宮殿の最上階に上ったことでスッパブッダは満足してしまい、空

中に漂わせ、空中に坐らせ、船で海中に入れ、山奥深くに入ろうとも、ブッダの言葉にはごまかしはない」と言った。このように話された時に、次の章句を唱えながら法を明らかにした・

一二八　天空にも、深海にも
　　山の洞窟にも
　　地上のどの場所にも
　　人が住んでいるかぎり　死は克服され得ないものである。

尊師が托鉢の継続を妨げられてから七日目に、スッパブッダが所有する軍馬が宮殿の地階で綱を切り、あちこちで暴れまわった。スッパブッダは最上階に坐っていたにもかかわらず、音を聞き、何が事件が起こったか訊いた。答えは「軍馬が暴れ出した」であった。馬はスッパブッダを見て、おとなしくなった。スッパブッダは馬を捕まえようとして坐っていた椅子から起ち上がり、ドアに向かった。まさしくその時、ドアが自然に開き、通路が適切に戻され、ドアの側にいた屈強な男が彼の首を掴み下に投げた。一階の階段の足場に着いた時、その時に大地が口を開けその隙間に彼は飲み込まれそこから下におりて、アヴィチ地獄（Avīci Hell）で再生した。

ゴータマと縁の深い、スッパブッダが、ゴータマの自分の娘と息子に対する扱いから、敵意を懐いたため、「佛に敵対する」という重罪を犯してしまう。「佛への敵対」のために救われない罰として「地獄」へ堕ちることをこの悪の章の掉尾に収められたものとして注目すべきであろう。仏教経典で悪人の代表格とされるディヴァダッタ（＝Devadatta＝提婆達多）や父親を殺害したアジャータサッツ（Ⓟ Ajātasattu Ⓢ Ajātaśatru＝阿闍世）が『ダンマパダ』の因縁譚でどう扱われているのか、「悪人正機」に示される悪人救済の思想の萌芽があるのかは、別の機会に論じたい。

註

（1）pāpavagga この章は悪行の章とか悪の章と訳されている。英訳では参照した、Max Müller, Juan Mascaró, Thomas Byrom, Harischandra Kaviratna および Acharya Buddharakkhit のうち Max Müler, Juan Mascaró, Harischandra Kaviratna および Acharya Buddharakkhit は evil と訳し、Thomas Byrom だけが mischief と訳している。pāpa の訳語は悪、悪人。vagga は①群、品、章。②別衆（水野弘元　『パーリ語辞典』による）

pāpa vagga は悪の章となる。

（2）通常「七佛通誡偈」は一八三句のみをいうが、因縁譚、教訓などは一連の章句についてなされているので、本稿ではこの三つの章句を「七佛通誡偈」として取り扱った。

（3）ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観　訳注編集「パーリ語仏典『ダンマパダ』」二三〇頁～二三二頁

中村元の訳では

「すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、自己の心を浄めること――これが諸の仏のおしえである。」（中村元訳「ブッダの真理のことば　感興のことば」三六頁）とされ、友松圓諦の訳では

「ありとある　悪を作さず
ありとある　善きことは
身をもって行い　おのれのこころを
きよめんこそ　諸仏のみ教えなり」とされ、（友松圓諦訳「法句経」一二六頁）とされ、宮坂宥勝の訳では、

「すべて悪しきことをせず、善き事を実行し、自身の心を清らかにすること、これが目ざめた人たち（＝諸仏）の教えである。」（宮坂宥勝著「暮らしのなかの仏教箴言集」二七八頁）となり、片山一良は

「いかなる悪も行なわず　もっぱら善を完成し
自己の心を浄くする　これが諸仏の教えなり」と訳し（片山一良著『ダンマパダ』二六六頁）、佐藤光夫は

「一切の悪をなさないこと　善行を身につけていること
自己の心を浄めること　これが諸々のブッダたちの教えである。」と訳し（佐藤光夫訳註『新現代語訳　DAMMAPADA（ダンマパダ）――原始仏教の智慧――』九三頁～九四頁）、木津無庵編『新訳佛教聖典』の第六編第一章第五節所収の『法句』では

「諸の悪なす勿れ、衆くの善行えよ、自が心を清うするこそ、これぞ諸の仏の教えなる」と訳している（木津無庵編『新訳佛教聖典』四〇七頁）。

また、抄訳や解説書の中では上野勝彦は

「一切の悪をなすことなく、善を行ない、
自らのこころを浄めること、これが諸仏の教えである」（上野勝彦著『真理の言葉　法句経』（シリーズ　仏教を生きる　五）一九五頁、）と訳し、花園大学の学長であった故山田無文は、詩の形態をふまえて、

「もろもろの悪　なすなかれ
もろもろの善　奉行せよ
自ら心を　浄むるは
これぞ諸仏の　教えなる」と訳し、鳥窠和尚と白楽天の逸話を紹介しているし（山田無文著『法句経　真理の言葉』一五一頁）、真言律宗の僧で浄瑠璃寺の住職の佐伯快勝は

「すべて悪しきことをなさず
善いことを行ない
自己の心を浄めること
これが諸仏の教えである」と訳し（佐伯快勝『智恵のことば』一三二頁）、作家で天台宗の尼僧の瀬戸内寂聴は友松圓諦の訳を基礎にした訳として
「あらゆる悪事をせず
　あらゆる善行を行い
わがこころをきよめるこそ
み仏のみ教えなり」と訳し（瀬戸内寂聴『寂聴　生きる知恵　法句経を読む』一五八頁）、浄土真宗の僧である釈徹宗は、中村元の訳に依拠しながら、超意訳を試み、「すべて悪しきことをなさず、善いことをおこない、自己の心を浄めること、――これが諸の仏の教えである。（超意訳：悪いことをしないで、良いことをする。自分の心を清浄にする。これこそが仏教である。」と示している。（釈徹宗『いきなりはじめる　ダンマパダ』二一四頁）、また英訳では、Max Müller は、
'Not to commit any sin, to do good, and to purify one's mind, that is the teaching of (all) the Awakened.'. と訳し（"Wisdom of the Buddha" The Unabridged Dhammapada" Translated and edited by F. Max Müller p.22)、Juan Mascar は、
'Do not what is evil. Do what is good. Keep your mind pure. This is the teaching of Buddha.'（"The Dhammapada" The path of perfection penguin books p.62）と訳し、Thomas Byromは
'Yet the teaching is simple
Do what is right,
Be pure.
At the end of the way is freedom.
Till then, patience.（Thomas Byrom "Dhammapada The saying of the Buddha" P.50）と訳し、Harischandra Kaviratna は
'Abstention from all evil, the doing of good deeds, and the purification of the mind, is the adomotion of the Enlightened Ones. と訳し
（http://www.theosociety.org/pasadena/dhamma/dham-hp.htm よりダウンロードした）、Acharya Buddharakkhitaは
'To avoid all evil, to cultivate good, and to cleanse one's mind――this is the teaching og the Buddhas'. とされ、
（http://www.accessiteinsight.org/tipila/kn/dhm 14 budd.html）よりダウンロードした。なお、漢訳は「諸悪莫作　諸善奉行　自浄其意是諸佛教」（『法句經』述佛品〔大正新脩大蔵経刊行会編『大正新脩大蔵経』第四巻　五六七頁　中段　以下　四巻―五六七頁―中段と表記する）なお本文中に示したパーリ語の原文はビルマ版のものを用いた。
ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北嶋泰観　訳注編集　前掲書二三〇頁～二三二頁

（4）

中村元の訳では、
「忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのブッダは説きたまう。他人を害する人は出家者ではない。他人を悩ます人は（道の人）ではない。」と訳し（中村元　前掲書　三六頁）、友松圓諦の訳では
「『忍辱こそ最上の行　くるしさをたえ忍ぶこそ
この上もなき涅槃なり』　諸仏はかく言いたまえり
まこと　出家にして　人をそこなうものなく
沙門にして　他を悩ますことなし」　と訳し（友松圓諦　前掲書　一二六頁）、宮坂宥勝の訳では、
「耐え忍ぶことは最上の苦行であり、耐えることは最高の安らぎ（＝涅槃〈ニバーナ〉であると、目ざめた人たちは説く。他の者を損なう者は出家者ではない。他の者を妨げる者は修行者〈サマナ〉ではない。）と訳し（宮坂宥勝　前掲書　二七八頁）、片山一良は
「耐え忍ぶは最上の修行　涅槃は最上、と諸仏は説く
他を害するは出家にあらず　他を悩ますは沙門にあらず」
と訳し（片山一良　前掲書　二六六頁）、佐藤光夫は
「忍辱忍耐は最上なる苦行である
涅槃が最上であると諸々のブッダたちは説く、
実に他者を他者を殺す者は出家者ではなく
他者を害する者は沙門ではない。」と訳し（佐藤光夫　前掲書　九四頁）、「新訳佛教聖典」は、
「忍ぶことは、なし難き苦行の最上ぞ、涅槃は最も勝れしものと、諸の仏は宣えり。出家は他を悩めず、他を害わぬものなれば。」（木津無庵編　前掲書　四〇七頁）、上野勝彦は
「寛恕と忍耐は最高の修行であり、最高の涅槃である、と諸仏は説く。
他者を害する人は出家者ではなく、他者を悩ます人は沙門ではないから。」（上野勝彦　前掲書　一九七頁）と訳し、瀬戸内寂聴は
「『耐え忍ぶことこそ
最上の行
苦しさに耐えしのぶこそ
この上なく涅槃なり』
み仏たちはこのように
お教えになられた
ほんとの出家者は
人を害さない

ほんとの出家者は
　人を悩ませない」（瀬戸内寂聴　前掲書　一五八頁　なお彼女は何故か一八二句～一八四句を一連のものとして解説している）としている。
また Max Müller は
'The Awakened call patience the highest penance, long-suffering the highest Nirvâna; for he is not an anchorite（pravragita）who strikes others, he is not an ascetic（sramana）who insults others.（Max Müller op cit. p.22）と英訳し、Juan Mascaró は、
'Forbearance is the highest sacrifice. NIRVANA is the highest good. This say the Buddhas who are awake. If a man hurts another, hei is not a hermit; if he offends another, he is not an ascetic.' と英訳し（Juan Mascaró op cit. p62）、更に Thomas Byrom は、
'If you wound grieve another,
You have not learned detachment.' と英訳し（Thomas Byrom op cit p.50）、Harischandra Kaviratna は
'Forbearance which is long-suffering is the highest austerity. The Buddhas declare nirvana to be the supreme state. Verily he is not an anchorite who harms another; nor is he an ascetic who causes grief to another. と英訳し（Harischandra Kaviratna op cit）、Acharya Buddharakkhita は
'Enduring patience is the highest austerity. "Nibbana is supreme," say the Buddhas. He is not a true monk who harms another, nor a true renunciate who oppresses others. と英訳している。（Acharya Buddharakkhita op cit）なお、漢訳は「忍爲最自守　泥洹佛稱上　捨家不犯戒　息心無所害」（法句経泥洹品〔大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四巻―五七三頁―上段〕である。

（5）禅定　サンスクリット語 dhyāna の音写である〈禅〉と、その意訳である〈定〉との合成語。心静かに瞑想し、真理を観察すること。またそれによって心身ともに動揺することがなくなり、安定した状態。大乗仏教の菩薩（ぼさつ）が実践すべき修行徳目である六波羅蜜（ろくはらみつ）の第五に配される。中国ではこの禅定を専らとする禅宗の成立を見た。なお、霊山に登って禅定に入り、修行を積むことから、日本では霊山の頂上をさして禅定ともいう。（中村元「仏教辞典」「仏教語大辞典」による）

（6）ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　北島大観　訳注編集　前掲書　二三〇頁～二三二頁
中村元の訳では、
「罵らず、害わず、戒律に関しておのれを守り、食事に関して（適当な）量を知り、淋しいところにひとり臥し、坐し、心に関することにつとめはげむ。――これがもろもろのブッダの教えである」（中村元　前掲書　三六頁）、友松圓諦は
「『誹らず　害わず　　戒めにおのれをまもり
　食において量を知り　　閑かなる所に坐して
　しかも易きに住せざれ』　と、かく
　諸仏は訓えたもう」（友松圓諦　前掲書　一二七頁）と訳し、宮坂宥勝は
「他人の悪口をいわず、損なわず、戒律を厳守し、食事の節度を知り、孤独に坐臥し、最高の思惟に専念すること、これが目ざめた者たちの教えである。」と訳しており（宮坂宥勝　前掲書　二七八頁）、片山一良は

「罵り害することもなく　　根本戒（パーティモッカ）をよく守り
　食事において量を知り　　遠く離れて臥し坐り
　また禪定によく励む　　これが諸仏の教えなり」と表現し（片山一良　前掲書　二六六頁）、佐藤光夫は、
「非難しないこと　害さないこと　また戒律に従い自己を律すること
　また食について適量を知ることと淋しい辺境が寝処であること
　そして精神統一について努力すること　これが諸々のブッダたちの教えである」と訳し（佐藤光夫　前掲書　九五頁）、「新訳仏教聖典」は、
「誹らず害わず、掟（波羅提木叉）によりて身を守り、食に量知り静処に坐臥ね、禪定を修むることは、これぞ、諸の仏の教なる。」（木津無庵　前掲書　四〇七頁）、上野勝彦は
「人を誘ることなく、害することなく、戒律を守り、食物の量を知り、人里離れて臥し、坐り、こころに関することに専念する。これが諸仏の教えである。」と訳し（上野勝彦　前掲誌　二〇一頁）、また Max Müller は
‘Not to blame, not to strike, to live restrained under the law, to be moderate in eating, to sleep and sit alone, and to dwell on the highest thought—— this is the teaching of the Awakened.’ と英訳し（Max Müller op.cit p.22）、Juan Mascaró は
‘Not to hurt by deeds or words, self-control as taught in the Rules, moderation in food, the solitude of the one’s room and one’s bed, and the practice of the highest consciousness: this is teaching of the Buddhas who are awake. と英訳し（Juan Mascaró p.62）、Thomas Byrom は
‘Offend in neither word nor deed.
Eat with moderation
Live in your heart.
Seek the highest consciousness.
Master yourself according to the law.
This is the simple teaching of the awakened.’ と英訳し（Thomas Byrom op cit pp50～51）、Harischandra Kaviratna は、
‘Forbearance which is long-suffering is the highest austerity. The Buddhas declare nirvana to be the supreme state. Verily he is not an anchorite who harms another; nor is he an ascetic who causes grief to another.’ と英訳し（Harischandra Kaviratna op cit）、Acharya Buddharakkhita は
‘Not despising, not harming, restraint according to the code of monastic discipline, moderation in food, dwelling in solitude, devotion to meditation - this is the teaching of the Buddhas.’ と英訳している。（Acharya Buddharakkhita op cit）『法句経』述佛品（大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四巻―五六七頁―上段

（7）　Eugene Watson Burlingame “Buddhist Legends” vol 2 p.60

（8）　Ⓢ Ⓟ Ānanda に相当する音写で、〈阿難陀（あなんだ）〉とも。アーナンダ。釈尊（しゃくそん）のいとこで十大弟子の一人。侍者として二十五年のあいだ釈尊につかえ、説法を聴聞（ちょうもん）することが特に多かったので、多聞第一と呼ばれる。釈尊の滅後、王舎城（おうしゃじょ

う）で仏典の第一回結集（けつじゅう）が行われた際には、経典の誦出（じゅしゅつ）に重要な役割を果たしている。（中村元「仏教辞典」）

（9）布薩　ふさつ　Ⓢ upavāsa　Ⓟ upavāsa　Ⓟ uposatha　プラークリット語の（u）posadha に相当する音写。原語の古形は upavasatha で、火もしくは神に近住する意。婆羅門教の新月祭と満月祭の前日に行われた儀式を仏教に取り入れたもの。発展段階に応じて内容や表現に相違が見られるに至った。半月に一度、定められた地域（＝結界）にいる比丘達が集まって、波羅提木叉を誦して自省する集会。のち、月に六回、六斎日（ろくさいにち）に在家（ざいけ）信者が寺院に集まって八斎戒を守り、説法を聞き、僧を供養する法会が盛んになり、これも〈布薩〉と称するようになった。（中村元「仏教辞典」「仏教語大辞典」による）

（10）『法句經』述佛品（『大正新脩大蔵経刊行会編　四―五六七頁―中段）

（11）五蓋　ごがい　Ⓢpañca nivaraṇān　五種類の心をおおう煩悩（ぼんのう）のことで、〈蓋〉（Ⓢnivaraṇān）は、おおうもの、障害の意。1）貪欲（欲貪とも、Ⓟ kāma-cchanda Ⓢ kāma-rāga）、2）瞋恚（怒り、Ⓟ vyānna-citta Ⓢ vyāpāda）、3）惛眠（身心が重苦しい状態の惛沈と心の眠気や萎縮をさす睡眠、Ⓢ styāna-middha）、4）掉悔（心のざわつきの掉挙と心を悩ます後悔、Ⓢ auddhatya-kaukṛtya）、5）疑（疑いやためらい、Ⓢ vicikitsā）、の五種の障害をいう。（中村元「仏教辞典」「仏教語大辞典」による）。また宮元啓一は、

「五蓋というのは、次の通りです。

一、　貪欲蓋　　欲しいと思う正の欲望

二、　瞋恚蓋　　避けたい、排斥したいと思う負の欲望。

三　　根沈睡眠蓋　　心が鈍重でどんよりしていて、あたかも眠りこけたときのようであること。

四、　掉挙悪作蓋　　心がざわつき、くよくよと思い悩むこと。「悪作」とは、「悔」とも漢訳されるものです。よくないことをしてしまったという悔恨の思いで、これはこれで必要なこともあるのですが、くよくよした思いを引きずったままでは修行の妨げになります。

五、　疑蓋　　教えの趣旨などについて、はたしてどうなのだろうかとの思いを起こし、ぐずぐずためらうこと。」（宮元啓一「仏教の倫理思想」九五頁）

（12）忍辱は「堪忍（かんにん）すること、耐え忍ぶこと。大乗の菩薩（ぼさつ）の修行徳目である六波羅蜜（ろくはらみつ）の一つ。あらゆる侮辱（ぶじょく）や迫害に耐え忍んで怒りの心をおこさないことで、これを修行実践することによって、すべての外からの障害から身を保護することができるので、「忍辱の衣」「忍辱の鎧」〔法華経法師品、勧持品〕といわれる。また仏の前生の修行時代に、忍辱を修行して〈忍辱仙人〉と称されたという本生譚はよく知られている。（中村元「岩波佛教辞典」）また上野勝彦はその法句経への解説の中で、「忍辱」の原語は、Ⓟ khantī　Ⓢ kṣānti であり、この偈の漢訳の「忍爲最自守　泥洹佛禰上　捨家不犯戒　息心無所害」では「忍」の一字で訳している。この偈には Ⓟ titikkhā（忍耐、穏忍）Ⓟ tapo　Ⓢ tapas（熱、苦行、鍛錬、修行）の語も用いられており、邦訳は

寛恕と忍耐は最高の修行であり、最高の涅槃であると、諸佛は説く。

他者を害する人は出家者ではなく、他者を悩ます人は沙門ではないから。（一八四句）

とすべきことを示し、その趣旨は人目をひく荒行に励むよりも、日常生活の中で忍辱行を積んでゆくほうが功徳になることである。（上野勝彦　前

掲書　一九七頁）。なお、khantiの訳語は忍、忍辱、忍耐、所忍、信忍、信仰があてられる。（水野弘元　前掲書）

（13）『法句經』泥洹品〔大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四―五七三頁―上段〕

（14）『法句経』述佛品〔大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四―五六七頁―上段〕

（15）ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　前掲書　四七頁

中村元は、

「心が安住することなく、正しい真理を知らず、信念が汚されたならば、さとりの智慧は全からず。」と訳し（中村元　前掲書　一五頁）、友松圓諦は

「こころ　安住するなく
正しき真理を知らず　信ずること
定まらざれば　かかる人に
智慧は満つることなし」と訳し（友松圓諦　前掲書　三四頁）、宮坂宥勝は

「心が安定せず、正しい真理を知らず、信仰の確立しない者には智慧は完成しない。」と訳し（宮坂宥勝　前掲書　二五六頁）、片山一良は、

「心が安定しておらず　正しい法をよく知らず
信が動揺する者は　慧の円満することはない」（片山一良　前掲書　五九頁）、佐藤光夫は、

「安住しないこころをもち正しい法を了知しない
信仰心が不安定な人に般若は完全にはならない。」と訳し（佐藤光男　前掲書　二〇頁）、「新訳仏教聖典」は

「心堅からず正法を知らず、信の動揺する人に、智慧の満ちたることはなし。」（木津無庵　前掲書　三九九頁）、上野勝彦は、

「こころが確立することなく、正法を理解せず、
その浄心が乱れた人には、智慧は完成することはない。」と訳し、（上野勝彦　前掲書　二四頁）また医学者の高田明和は

「心に安住なく
正しき真理を知らず
信念を汚されしものに
全き智慧はなからん」と訳したうえで、「達磨安心」（「無門関　第四十一則」）を付している。（高田明和『幸せを生む〈魔法〉　ブッダのことばと瞑想法』二〇八頁）としている。また英訳では Max Müller は、

'If a man's thoughts are unsteady, if he does not know the true law, if his peace of mind is troubled, his knowledge will never be perfect. と訳し（Max Müller op cit p.5）、Juan Mascaró は、

'He whose mind is unsteady, who knows not the path of Truth, whose faith and peace are ever waving, he shall never reach fullness of wisdom,.' と訳し（Juan Mascaró op cit p.40）、Thomas Byrom は

‘An untroubled mind,
No longer seeking to consider
What is right and what is wrong,
A mind beyond judgments,
Whaches and understand..’と訳し（Thomas Byrom op cit p.12）、Harischandra Kaviratna は、
‘He whose mind is not steady, who is ignorant of the true Dhamma, whose tranquillity is ruffled, the wisdom of such a man does not come to full-ness.’と訳し（Harischandra Kaviratna op cit）、Acharya Buddharakkhita は
‘Wisdom never becomes perfect in one whose mind is not steadfast, who knows not the Good Teaching and whose faith wavers.’と訳している。なお、漢訳は
「心無住息　亦不知法　迷於世事　無有正智　念無適止　不絶無邊　福能遏悪
覺者爲賢　佛説心法　雖微非眞」（法句経　心意品）〔大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四―五六二頁―上段〕である。

（16）

中村元は、
「心が煩悩に汚されることなく、おもいが乱れることなく、善悪のはからいを捨てて、目ざめている人には、何も恐れることが無い。」（中村元前掲書　一五頁）、友松圓諦は、
「こころに貪染をはなれ　おもいみだるるなく
善福と　罪悪と
ふたつながらに　とらわれざる
かかる覚悟ある人に　怖畏あることなし」と訳し（友松圓諦　前掲書　三五頁）、宮坂宥勝は
「心に貪欲なく、心乱れることなく、善悪を捨て、目ざめた者には怖れはない。」と訳し（宮坂宥勝　前掲書　二五六頁）、片山一良は、
「心が濡れることのない　心が打たれることのない
善と悪を超えている　目覚めた者に恐れなし」と訳し（片山一良　前掲書　五九頁）、佐藤光夫は、
「こころが煩悩に汚されることのない　こころが混乱することのない
善と悪の区別を捨て去った目覚めている人に恐怖は存在しない。」（佐藤光夫　前掲書　二〇頁）、「新訳仏教聖典」は、
「心、貪欲に湿るるなく、思、瞋恚に煩わさるるなく、善と悪を離れつる、眼ざめし人には恐なし。」と訳し（木津無庵　前掲書　三九九頁～四〇〇頁）、上野勝彦は、
「こころに煩悩が入ることなく、こころが乱されることなく、
善悪（の差別）を捨てた目覚めた人には恐怖はない。」と訳している（上野勝彦　前掲書　二四頁）。また英訳では Max Müller は、

'If a man's thoughts are not dissipated, if his mind is not perplexed, if he has ceased to think of good or evil, then there is no fear for him while he is watchful.' と訳し（Max Müller op cit p.5）、Juan Mascaró は、

'But he whose mind in calm self-control is free from the lust of desires, who has risen above good and evil, he is awake and has no fear.' と訳し（Juan Mascaró op cit p.40）、Thomas Byrom は、

'Know that the body is a fragile jar,
And make a castle of your mind.
In every trial
Let understanding fight for you
To defend what you have won.' と訳し（Thomas Byrom op cit pp12～13）、Harischandra Kaviratna は、

'Fear has he none, whose mind is not defiled by passion, whose heart is devoid of hatred, who has surpassed（the dichotomy of）good and evil and who is vigilant.' と訳し（Harischandra Kaviratna op cit）、Acharya Buddharakkhita は

'There is no fear for an awakened one, whose mind is not sodden（by lust）nor afflicted（by hate）, and who has gone beyond both merit and demerit.' と訳している。なお、漢訳は

「當覺逸意　莫随放心　見法最安　所願得成　慧護微意　斷苦因縁」（法句経　心意品）〔大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四―五六二頁―上段〕である。

（17）Eugene Watson Burlingame op.cit vol.2 pp 12～15

（18）サンガ（＝僧伽）Ⓢ Ⓟ saṃgha　サンスクリット語・パーリ語 saṃgha に相当する音写。サンガ。単に〈僧〉とも音写する。また〈衆（しゅ）〉〈和合衆（わごうしゅ）〉と漢訳。原義は集団、集会。古代インドでは、自治組織をもつ同業者組合、共和政体のことをサンガと呼んだ。これが仏教に採用されて修行者の集まり、教団の称とされた。三宝の一つ。（中村元「仏教辞典」中村元「仏教語大辞典」）

（19）ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　前掲書　一五一頁

中村元は

「善をなすのを急げ。悪から心を退けよ。善をなすのにのろのろしたら、こころは悪事をたのしむ。」と訳し（中村元　前掲書　二六頁）、友松圓諦は、

「善きことには　いそぎおもむくべし
悪しきことにむかいて　心をまもるべし
功徳を作すに　こころうきものは
悪のなかに　こころおぼるるなり」と訳し（友松圓諦　前掲書　八四頁）、宮坂宥勝は、

「人は、善に急ぐがよい。悪より心を防ぐがよい。善〔をなすこと〕を怠れば、意は悪をよろこぶ。」と訳し（宮坂宥勝　前掲書　二六八頁）、

片山一良は、
「善事に対して急ぐべし　　心を悪から遠ざけよ
善を緩くなすならば　　心が悪を楽しむゆえに」（片山一良　前掲書　一七〇頁）、佐藤光夫は、
「汝らは善を急ぎなさい　　悪からこころを防ぎ守りなさい、
善なる行いをなすのにぐずぐずするこころは悪の中で楽しむ。」と訳し（佐藤光夫　前掲書　五八頁）、「新訳仏教聖典」は
「善には急げ、心を悪よりまもれ。功徳をなすに怠るは、心に悪を喜ぶものぞ。」（木津無庵編　前掲書　四〇二頁）とし、上野勝彦は、
「急いで善をなせ。こころを悪から守るべきだ。
善をなすのにためらえば、こころは悪において楽しむから。」と訳し（上野勝彦　前掲書　一〇〇頁）、瀬戸内寂聴は、
「善いことは
いそいで行え
悪い事には心を
むけないように
善行をぐずぐずすれば
心は悪事を楽しむ」と訳している（瀬戸内寂聴　前掲書　一七一頁～一七二頁）。また、英訳では Max Mŭller は、
‘If a man would hasten towards the good, he should keep his thought away from evil; if a man does what is good slothfully, his mind delights in evil.’（Max Mŭller op.cit p.15）
と訳され、Juan Mascaró は、
‘Make haste and what is good; keep your mind away ftom evil. If a man is slow in doing good, his mind finds pleasure in evil.’ と訳され（Juan Mascaró op.cit p.52）、Thomas Byrom は、
‘Be quick to do good.
If you are slow,
The mind, delighting in mischief,
Will catch you.’ と訳し（Thomas Byrom op cit p.33）、Harischandra Kaviratna は
‘Make haste in doing good and restrain the mind from evil; if one is slow in doing good, the mind finds delight in evil.’ と訳し（Harischandra Kaviratna op cit）, Acharya Buddharakkhita は
‘Hasten to do good; restrain your mind from evil. He who is slow in doing good, his mind delights in evil.’ と訳している。（Acharya Buddharakkhita op cit）なお、漢訳は
「見善不従　　反随悪心　　求福不正　　反樂婬」および

「凡人爲悪　愚癡快意　令後鬱毒」（ともに法句経　悪行品）〔大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四―五六四頁―下段〕

（20）Eugene Watson Burling op. cit vol.2 pp262～264

（21）Ⓢ tathāgata　如来　ここでは文意から尊師と訳したが、本来は佛の尊称の一つである如來の語が宛てられる。すなわち、修行を完成した者の称。諸宗教を通じて用いられた。後にもっぱら釈尊（しゃくそん）の称呼となり、さらに大乗仏教では諸仏の称呼ともなった。サンスクリット語 tathāgata の語源・原義に関しては諸論があり、確定していない。〈そのような（tathā）境涯（gati）に赴（おもむ）いた人〉の意ととる説もある。ジャイナ教聖典にも見え、おそらく仏教者の案出した語ではなく。当時一般に周知の語だったらしく、初期の仏典では語義説明がされていない。教理的な解釈が現れるのは部派仏教になってからである。tathāā は〈そのように〉〈如実に〉の意である。gata は〈去った〉、āgata は〈来た〉の意。そこで教理的解釈では、tathā＋āgata と見て、〈（過去の仏と）同じように来た〉〈真実から来た〉と解釈したり、tathā＋gata と見て、〈同じように行った〉〈真実へ赴いた〉などと解釈している。漢訳仏典では前者のようにとり、〈如来〉と訳す。後者に従い〈如去〉と訳した例は、この語の教理的解釈の文を除けばほとんどない。漢語〈如来〉は後漢の安世高から始まる。中国仏教では概して〈真実より衆生の世界へ来たもの〉と解釈している。〈如来〉などの仏の称号を〈如来十号〉（十号）という。すなわち、如来・応供・等正覚（もしくは正遍知）・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊である。各称号は初期仏教以来あるが、これを〈十号〉として数えることは後のもので、分け方も一定していない。概して、南伝（南方仏教）では如来を除いて応供以下を一まとめに考えていたようであるが、北伝（北方仏教）では、上記十一の称号を〈十号〉とするために、世尊を除いたり、無上士と調御丈夫を一つに数えたりしている。　中村元「仏教辞典」「仏教語大辞典」による）

（22）ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　前掲書　一五四頁

中村元は

「まだ悪の報いが熟しないあいだは、悪人でも幸運に遇うことがある。しかし悪の報いが熟したときには、悪人はわざわいに遇う。」と訳し（中村元　前掲書　二七頁）、友松圓諦は、

「もしひと　　よきことをなさば
これを　　また　また　なすべし
よきことをなすに　　たのしみをもつべし
善根をつむは　　幸いなればなり」と訳し（友松圓諦　前掲書　八五頁）、宮坂宥勝は、

「悪が熟さない限り、たとえ悪者といえども楽しみを経験する。しかるに、悪が熟するや、〔そのとき〕悪しき者は、もろもろの悪を経験する。」と訳し（宮坂宥勝　前掲書　二六八頁）、片山一良は、

「悪がいまだ熟さぬうちは　　悪人さえ善を見る
しかし悪が熟したときは　　悪人はもろもろの悪を見る」と訳し（片山一良　前掲書　一七四頁）、佐藤光夫は、

「悪人でも幸福を見知る

悪行が果熟しない（責められない）間には、
しかし悪行が果熟する（責められる）その時に
また悪人は諸々の悪を見知る。」と訳し（佐藤光夫　前掲書　六〇頁）、「新訳仏教聖典」は、
「悪人は、悪の果報の熟らぬ中は、幸福見るも、悪の果報の熟る時に、禍を見る。」（木津無庵　前掲書　四〇二頁）、上野勝彦は、
「悪がまだ熟さぬ間は、悪人といえども幸運にあう。
しかし悪が熟したときは、悪人は災いにあう。」と訳し（上野勝彦　前掲書　一〇四頁）、瀬戸内寂聴は、
「悪の報いが熟さぬうちは
悪人だって幸運にあう
だけど悪の報いが熟した時は
悪人に災難ふりかかる」と訳している。（瀬戸内寂聴　前掲書　一七四頁）また英訳では Max Mŭller は
‘Even an evil-doer sees happiness as long as his evil deed has not ripened; but when his evil deed has ripened, then does the evil-doer see evil.’（Max Mŭller op cit p.15）、Juan Mascaró は、
‘Hold not a sin of little worth, thinking ‘this is little to me.’ The falling of drops of water will in time fill a water-jar. Even so the foolish man becomes full of evil, although he gather it little by little.’ と訳し（Juan Mascaró op cit p.52）、Thomas Byrom は
‘A fool is happy
Until his mischief turns against him.
And a good man may suffer
Until his goodness flowers.’ と訳し（Thomas Byrom op cit p.33）、Harischandra Kaviratna は
‘Even the wrongdoer finds some happiness so long as（the fruit of）his misdeed does not mature; but when it does mature, then he sees its evil results.’ と訳し（Harischandra Kaviratna op cit）Acharya Buddharakkhita は
‘It may be well with the evil-doer as long as the evil ripens not. But when it does ripen, then the evil-doer sees（the painful results of）his evil deeds.’
と訳している（Acharya Buddharakkhita op cit）。なお、漢訳は
「妖孽見福　其悪未熟　至其悪熟　自受罪虐」（法句経　悪行品）〔大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四一五六四頁一下段〕

(23) ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　前掲書　一五四頁
中村元は
「まだ善の報いが熟しないあいだは、善人でもわざわいに遇うことがある。しかし善の報いが熟したときには、善人は幸福に遇う。」と訳し（中村元　前掲書　一七頁）、友松圓諦は、
「善の果実いまだ　うれざる間は

善事をなせる人も　　わざわいを見ることあるべし
されど　　善の果実
熟するに至らば　　善人は幸福を見ん」と訳し（友松圓諦　前掲書　八六頁）、宮坂宥勝は、
「幸が熟さない限り、たとえ善き者といえども悪を経験する。しかるに、幸が熟するや、〔そのとき〕善き者はもろもろの楽しみを経験する。」
と訳し（宮坂宥勝　前掲書　二六八頁）、片山一良は、
「善がいまだ熟さぬうちは　　善人さえも悪を見る
しかし善が熟したときは　　善人はもろもろの善を見る」と訳し（片山一良　前掲書　一七四頁～一七五頁）、佐藤光夫は、
「賢者でも悪を見知る
賢さが異熟しない（果報にならない）間には、
しかし賢さが異熟する（果報になる）その時に
また賢者は諸々の幸福を見知る。」と訳し（佐藤光夫　前掲書　六一頁）、「新訳仏教聖典」は、
「善人も、善き果報の熟らぬ中は、禍みるも善き果報の熟る時に、福を見る。」（木津無庵　前掲書　四〇三頁）、上野勝彦は、
「善がまだ熟さぬ間は、善人といえども災いにあう。
しかし善が熟したときは、善人は幸運にあう。」と訳し、（上野勝彦　前掲書　一〇四頁）高田明和は、
「善の報いの熟さざるとき
善人でもわざわいをみる
善の報いの熟せるときには
かならず幸福を見るべし」とした上で、
「もし悪をなすならば、そは業に積まれ
もし善をなせば、そも業に積まる
人は業を受け継ぎ
業は滅びることなし」（『感興の言葉』九―八）を付している。（高田明和　前掲書　二一二頁）また英訳では Max Müller は
'Even a good man sees evil days, as long as his good deed has not ripened; but when his good deed has ripened, then does the good man see happy days' と訳し（Max Müller op cit p.15）、Juan Mascaró は、
'A man may find pain in doing good as long as his good comes then that man finds good indeed.' と訳し（Juan Mascaró op cit p.52）、Thomas Byrom は、
'Do not make light of your failings,
Saying, "What are they to me?"

A jug fills drop by drop.
So the fool becomes brimful of folly.'と訳し（Thomas Byrom op cit p34）、Harischandra Kaviratna は
'Even the doer of good deeds knows evil（days）so long as his merit has not matured;
but when his merit has fully matured, then he sees the happy results of his
meritorious deeds.'と訳し（Harischandra Kaviratna op cit）、Acharya Buddharakkhita は、
'It may be ill with the doer of good as long as the good ripens not. But when it does ripen, then the doer of good sees（the pleasant results of）his good deeds.'と訳している（Acharya Buddharakkhita op cit）。なお、漢訳は
「禎祥見禍　其善未熟　至其善熟　必受其福」（法句経　悪行品）〔大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四―五六四頁―下段〕

（24）須達　サンスクリット語・パーリ語 Sudatta に相当する音写。スダッタ。〈須達多〉とも音写する。貧しく孤独な人々に食を給したところから〈給孤独長者〉と呼ばれた人の本名。中インドのシラーヴァスティー（舎衛城）の長者で、釈尊（しゃくそん）とその教団のためにシラーヴァスティーのジェータ（Jeta, 祇陀（ぎだ））太子の苑林を買い取って祇園精舎（を建立して寄進したので有名。（中村元「仏教辞典」）

（25）帝釈天　Ⓢ Indra　Ⓢ Śakra　インドラ神のこと。〈帝釈〉のフルネームは　Ⓢ śakro devānām indraḥ（神々の力強い帝王、の意）で、〈帝〉は indra の訳、〈釈〉は śakra の音写。インド最古の聖典『リグ―ヴェーダ』における最高神で、雷霆神（らいていしん）の性格をもち、理想化されたアーリヤ戦士の姿をとる英雄神である。後に仏教に取り入れられて、梵天（ぼんてん）とともに護法（ごほう）の善神となる。欲界の第二天である忉利天の主で須弥山山頂の喜見城に住み、阿修羅と戦ってこれを降し、天下に使臣をつかわして、万民の善行を喜び、悪行をこらしめる威徳ある神である。十二天の一で、須弥山などの一切の山に住む天神や鬼類の主として東方を守護する。（中村元「仏教辞典」）

（26）ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　前掲書　一五五頁
中村元は、
「『その報いはわたしには来ないだろう』とおもって、悪を軽んずるな。水が一滴ずつ滴りおちるならば、水瓶でもみたされるのである。愚かな者は、水を少しずつでも集めるように悪を積むならば、やがてわざわいにみたされる。」と訳し（中村元　前掲書　二七頁）友松圓諦は、
「『その報い　よも　われには来らざるべし』
かく思いて　あしきを軽んずるなかれ
水の滴　したたりて
水瓶をみたすがごとく　愚かなる人は
ついに悪をみたすなり」と訳し（友松圓諦　前掲書　八六頁）、宮坂宥勝は、
「『わたしに、ついにそれ〔＝悪の結末〕はやって来ないだろう』と悪を軽く見てはならない。水滴が落ちて水がめを満たすように、愚か者は少しずつ悪を積みながら、〔悪で〕いっぱいになる」と訳し（宮坂宥勝　前掲書　二六八頁）、片山一良は、
「『それは私に来ないだろう』と　悪を軽視するなかれ

水が滴り落ちることより　　水の瓶も満ちてゆく
そのように愚者も少しずつ　　悪を積んで満ちてゆく」
と訳し（片山一良　前掲書　一七七頁）、佐藤光夫は、
「〝それは私のもとには来ないだろう〟と悪を軽んじてはならない、
水滴が落ちることによって水瓶でも（水が）満ちる、
愚者は悪行を少しずつ積もらせて（悪に）満ちる。」と訳し（佐藤光夫　前掲書　六一頁）、「新訳仏教聖典」は、
「悪、われに来るなからんと、悪を軽しむことなかれ。点滴す水も、落ちては瓶を満たすごと、愚かの者は少しずつ、積みては悪に満つるなり。」
とし（木津無庵　前掲書　四〇三頁～四〇四頁）、瀬戸内寂聴は、
「『その報い
わたしに来ないだろう」
そう思って悪行を
軽く見るな
水一滴のしたたりも
したたりつづけて
やがて
水瓶をあふれさせる
愚かな者は、
小さな悪をつみ重ねて
いつの間にか
悪行にみたされている」と訳し、（瀬戸内寂聴　前掲書　一六六頁～一六七頁）高田明和は、
「小悪といえども輕んずるなかれ
水滴のしたたりて水がめを満たすがごとく
悪を積むものは
かならずわざわいに満たさるべし」と示した上で「陰徳は耳鳴りのごとし」（禅語）を付している。（高田明和　前掲書　二一三頁）また英訳では、Max Müllerは、
‘Let no man think lightly of evil, saying in his heart, It will not come nigh unto me. Even by the falling of water-drops a water-pot is filled; the fool becomes full of evil, even if he gather it little by little.’と訳し（Max Müller op cit p.15）、Juan Mascaróは
‘Hold not a sin of little worth, thinking ‘this is little to me.’ The falling of drops of water will in time fill a water-jar. Even so the foolish man becomes

full of evil, although he gather it little by little.’と訳し（Juan Mascaró op cit p.52）、Thomas Byromは、
‘Do not belittle your virtues,
Saying, “They are nothing.”
A jug fills drop by drop.
So the wise man becomes brimful of virtue.’と訳し（Thomas Byrom op cit p34）、
Harischandra Kaviratnaは
‘Do not think lightly of evil, saying, “It will not come to me.” By the constant fall of waterdrops, a pitcher is filled; likewise the unwise person, accumulating evil little by little, becomes full of evil.’と訳し、Acharya Buddharakkhitaは、
‘Think not lightly of evil, saying, “It will not come to me.” Drop by drop is the water pot filled. Likewise, the fool, gathering it little by little, fills himself with evil.’と訳している。漢訳は
「莫輕小悪　以爲無殃　水滴雖微　漸盈大器　凡罪充滿　從小積成」（法句経　悪行品）〔大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四―五六五頁―上段〕
ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　前掲書　一六〇頁

(27)

中村元は
「或る人々は〔人の〕胎に宿り、悪をなした者どもは地獄に堕ち、行ないの良い人々は天におもむき、汚れの無い人々は全き安らぎに入る」と訳し、（中村元　前掲書　二八頁）、友松圓諦は、
「あるものは胞胎に生まれ　あしきをなせる者は
悪処にゆき　行いよきものは
福処にゆき　諸漏のつきたるものは
涅槃に入るなり」と訳し（友松圓諦　前掲書　八九頁）、宮坂宥勝は、
「或る者は母胎に入り、悪をなす者は地獄に〔行き〕、完成者は天に行き、苦悩なき者は心の安らぎを得る。」と訳し（宮坂宥勝　前掲書　二六九頁）、片山一良は、
「ある者らは母胎に生まれ　悪業の者らは地獄に堕ちる
善業の者らは天界に行き　無漏の者らは涅槃にいたる」と訳し（片山一良　前掲書　一八四頁）、佐藤光夫は、
「ある人々は母胎に　悪しき業のある者たちは地獄に　生まれる、
善行をなした者たちは天上界に行く　煩悩を滅ぼした人々は涅槃に入る。」と訳し（佐藤光夫　前掲書　六四頁）、「新訳仏教聖典」は、
「或る者は、人として生れ、悪なせし者、地獄に生まれ、善人は天界に行き、煩悩なきひと涅槃には入る。」（木津無庵　前掲書　四〇四頁）、
上野勝彦は、

「ある人々は母胎に生まれ、悪をなした人は地獄に行き、
善行者は天界に行き、汚れのない人々は涅槃に入る。」と訳している。（上野勝彦　前掲書　一〇六頁）また英訳では、Max Müllerは、
‘Some people are born again; evil-doers go to hell; righteous people go to heaven; those who are free from all worldly desires attain Nirvâna.’と訳し
（Max Müller op cit p15）、Juan Mascaróは、
‘Some people are born on this earth; those who do evol are reborn in hell; the righteous go to heaven; but those who are pire reach Nirvana.’と訳し
（Juan Mascaró op cit p.53）、Thomas Byromは、
‘Some are reborn in hell,
Some in this world,
The good in heaven.
But the pure are not reborn.’と訳し（Thomas Byrom op cit p.35）、Harischandra Kaviratnaは
‘（After death）, some are reborn in the womb; evildoers are born in hell; those who
commit meritorious deeds go to heaven; and those who are free from worldly desires
realize nirvana.’と訳し（Harischandra Kaviratna op cit）、Acharya Buddharakkhitaは、
‘Some are born in the womb; the wicked are born in hell; the devout go to heaven; the stainless pass into Nibbana.’と訳している（Acharya
Buddharakkhita op cit）。また漢訳は
「有識堕胞胎　悪者入地獄　行善上昇天　無爲得泥」（法句経　悪行品）〔大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四―五六七―上段〕

（28）Eugene Watson Burlinggame op. cit vol 2 pp284～286

（29）ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修　前掲書　一六三頁
中村元は、
「大空の中にいても、大海の中にいても、山の中の洞窟に入っても、およそ世界のどこにいても、死の脅威のない場所は無い。」と訳し（中村
元　前掲書　二八頁）、友松圓諦は、
「虚空にあるも　海にあるも
はた　山間の　窟に入るも
およそ　この世に　死の力の
およびえぬところはあらず」と訳し（友松圓諦　前掲書　九〇頁）、宮坂宥勝は、
「空でも、海のまんなかでも、山々の洞穴に入っても、この世界の場所で、死が支配しないところは、何処にも存していない。」と訳し（宮坂
宥勝　前掲書　二六九頁）、片山一良は、
「大空になし、大海にもなし　山の洞に入るともなし

死が襲うことのない場所は　　世界のどこにも見られない」と訳し（片山一良　前掲書　一八九頁）、佐藤光夫は、
「大空のなかにはない　　大海の中にはない
山中の裂け目に入ったところにはない
大地世界にそのようなところは存在しない
死の圧迫がなく生きられるようなところは。」と訳し（佐藤光夫　前掲書　六五頁）、「新訳仏教聖典」は、
「虚空にも海にも、又は山の洞窟に入りても、死の領らぬ所なし。」と訳し（木津無庵　前掲書　四〇四頁）、山田無文は、
「大ぞらも　　海のそこいも
山ほらも　　世界のはたて
いずくにか　　死のことわりは
逃るべき」と訳し（山田無文　前掲書　一一一頁）、瀬戸内寂聴は、
「大空にいようと
大海にいようと
または山奥の
洞窟に入ろうとも
およそこの世に
死の力の届かぬ所はない」と訳し（瀬戸内寂聴　前掲書　一七三頁）、釈徹宗は、
「大空の中にいても、大海の中にいても、山の中の洞窟に入っても、およそ世界のどこにいても、死の脅威のない場所は無い。
（超意訳：空をどこまで行こうと、大海をどこまでもくろうと、山中深く分け入ろうと、この世界のどこにいても私が生み出す悪の行為から逃れることはできない死の恐怖から逃れることができる場所はない。死に真正面から向き合うしかないのだ。」と訳し、（釈徹宗　前掲書　一六四頁～一六五頁）高田明和は、
「大空の中にありても
大海の中にありても
山中の洞窟に潜むとも
およそ世界のどこにあるとも
死の恐れから逃るることなし」と示した上で、「生とも言わず、死とも言わず」（『碧限録』第五十五則）を付している。（高田明和　前掲書　二一三頁）。また、英訳では、Max Müller は、
'Not in the sky, not in the midst of the sea, not if we enter into the clefts of the mountains, is there known a spot in the whole world where death could not overcome（the mortal), と訳し（Max Müller, op cit p.16)、Juan Maacaró は

‘Neither on the sky, nor deep in the ocean, nor in a mountain-cave, nor anywhere, can a man be free from power of death.’と訳し（Juan Maacaró op cit p.53）、Thomas Byrom は
‘Not in the sky,
Not in the midst of the ocean,
Nor deep in the mountains,
Nowhere
Can you hide from your own death.’と訳し（Thomas Byrom op cit p.35）、Harischandra Kaviratna は
‘Not in the sky, not in the middle of the ocean, not even in the cave of a mountain, should one seek refuge, for there exists no place in the world where one will not be overpowered by death.’と訳し（Harischandra Kaviratna op cit）、Acharya Buddharakkhita
‘Neither in the sky nor in mid-ocean, nor by entering into mountain clefts, nowhere in the world is there a place where one will not be overcome by death.’（Acharya Buddharakkhita op cit.），また漢訳は
「非空非海中　非隠山石間　莫能於此處　避免宿悪殃」（法句経　悪行品）（大正新脩大蔵経刊行会編　前掲書　四一五六七頁一上段）である。

（30）Eugene Watson Burlingame op.cit vol 2 pp291～293